

3/4(土) まじ! 倫理部です。この件は、胸につかえていた筆から今週の倫理  
の中を絶へがありません。この矢は「矢のうちに」、うなばれとなって  
発表にてお読みください。反省!

## 今週の倫理 1015号

2017.2.4 ~ 2.10

二月のテーマ □ (くわ)

よい」との

実行を  
語る

毎月第一週に配信する「今週の  
倫理」では、倫理研究所会長・  
丸山竹秋（一九二一—一九九九）  
のことばを掲載します。

草や花が咲く鳥

え・浅妻健司

第一について、わかりきった  
ことと思わず、深く自戒する必要  
がある。  
「きょうはね、おばあさんが横  
断歩道を渡れずにうろうろしてい  
たから、手をひいて渡してあげた  
んだよ」

親しい人に、こう何気なく打ち  
あけ、そのままの気持でいるのは  
よい。ところがうつかりすると「こ  
んないことをしたぞ」といった  
「自慢げな、得意な、人を見下す氣  
持が、ひよいと頭をもたげるので

いことをしたとき、人に打ち  
あけたくなることがしばしば  
ある。これまた人情の自然という  
べきであろう。

よいことの実行を人に告げる場  
合（これを倫理の「実践報告」といお  
う）気をつけなければならぬこと  
がある。第一に自慢し、偉ぶる気  
持で告げてはいけないということ、  
第二に、かといって黙りこんでし  
まうのではなく、人や社会のお役に  
たてたらという謙虚な気持で時に  
は進んで、報告することも必要だ  
と知ることである。

第一については、わかりきった  
ことと思わず、深く自戒する必要  
がある。

「きょうはね、おばあさんが横  
断歩道を渡れずにうろうろしてい  
たから、手をひいて渡してあげた  
んだよ」

ある。「偉ぶるのは馬鹿の始まり」  
というが、その偉ぶる心は、何か  
よいことをしたとか、している時、  
に知らず知らずのうちに起り易い。  
この「知らず知らずのうちに」  
というところが人間の弱点という  
か、恐ろしいところで、よいこと  
をしたぞという自覚が、ややもす  
ると偉ぶる、いわば悪を生み出す  
もとにになる。

だから、よいことをしたと思つ  
たら、これは自分の力でやつたの  
ではなく、大自然がチャンスを与  
えてくれたおかげでできたのだ、  
ありがたいことだといった、へり  
下つた気持をもつことだ。そうし  
た気持に自然になれるよう今まで  
自分自身を高めるよう、平素の心  
がけを磨いてゆくことだ。

つぎに第二の点について。よい  
ことをしてもあえて口に出さず、  
黙りこくつて我慢している人があ  
る。ちょっと考えると、よいよう  
だが、しかし、これはまた何と不  
自然なことであろう。話すことが  
悪いのではなく、自慢することが  
いけないのだから、話したり、う

ちあけたいときには自然のままに  
そうすべきであろう。それを我慢  
し、押えつけるのは、それこそ一  
種のうぬぼれともなり、偉そうな  
心に通ずるおそれがある。またよ  
くない強情ともいえよう。

その時、その場の雰囲気、また  
集いの趣旨などによつては、進ん  
で自分のしたよいことを報告した  
ほうがよい。祈るような心で、自  
慢するのでも、偉ぶるのでもなく、  
じごくあたり前に淡淡として報告  
するのである。

口は食べるためにもあり、話す  
ためにもある。その口から災いも  
出るが幸いも生ずる。その幸いが、  
とくに人の参考になり、社会のた  
めにもなる意味のものであればあ  
るほど、すばらしいではないか。

これを聞いた人が共鳴したり、  
また実行しようとする気分をすこ  
しでも高めるようなことがあれば、  
それだけでも意義があるのでな  
いか。現代の混乱した世相のもと  
では、こうした実践報告こそさら  
に広く望まれていると思う。

（月刊『新世』1974年10月号より）